

朝鮮半島の領土論争

浦野起央

1 はしがき

高句麗は、紀元前一世紀頃から紀元六六八年まで中国東北地域及び朝鮮半島北部地域に存在した東アジアの古代王国である。従来、朝鮮古代史において高句麗は、独立存在の国家体として見做されてきたが、一九八〇年代頃から、中国の歴史学会において、それは、歴代の中央に隷属・臣属された地方政権であり、それで中国の歴史に属するとう提起がなされた。他方、高句麗は現在、中国境内の国内城（吉林省集安市）から平壤へ都を移して以後、朝鮮の古代史として正式に見做されており、高句麗の歴史は中国史あるいは朝鮮史の一史両用論が主流であった。

以後、高句麗が領土としていた朝鮮半島北部地域が中国人が建国した箕子朝鮮・衛満朝鮮の故地であり、漢四郡（樂浪郡・臨屯郡・真番郡・玄菟郡）が所在した地域であることから、韓国・北朝鮮が歴史事実による檀君神話をもって

建国ナショナルリズムの発揚と接合して歴史認識を確認する一方、中国では、社会科学院が二〇〇二年二月東北辺境の歴史と現状に対する系列プロジェクト、東北工程が着手され、歴史論争の素地のある高句麗・渤海研究が展開されることとなった。

この地域は、満州国間島省（延吉県・和龍県・汪清県・琿春県・安図県）を経て、現在も朝鮮族が圧倒的に居住する延辺朝鮮族自治州で、そこはかつて間島と呼ばれていた。そしてその地域は、日本が朝鮮人の意志を代弁して、中国清朝との交渉で一九〇九年九月締結した間島協約の対象とされた地域で、これまで領有権をめぐり争点となってきた。

その最初の交渉で確認された白頭山の境界碑は、一七二二年の建立当初から、問題を生じていた。清朝と朝鮮の国境線は、西は鴨緑江を境とし、東は土門江を境としていた。この土門江を、中国側は図們江（韓国名、豆満江）と解したが、韓国側は松花江と解した。後者の解釈では、中国・朝鮮国境は、松花江とその下流の黒龍江となり、間島を含む広大な土地が朝鮮領土となってしまう。このために、間島条約で、中国の版図とされた。

そして、新中国は、金日成への圧力攻勢で、一九六二年一〇月中国・朝鮮条約が成立し、中国の意図を明確にした版図が確認された。

そして、再び高句麗論争、そして高句麗を継承した高麗の歴史論争となった。それは、中国・朝鮮国境問題の根源を論じた現在性の問題として議論を提起しているところである。その高句麗は、朝鮮半島とも漢民族の歴史とも関係のない異民族が建国した国家である。それを中国は、高句麗史を中国の地方政権の歴史として、韓国の歴史認識を封じ込めんとした。これに対し、韓国は、建国神話と歴史事実を混同させつつも、現在の政治的イデオロギーを押さえ込もうとすることへの対決と走った。ここに間島問題が再現されてしまった。

2 朝鮮半島の領土

朝鮮半島とその近隣についての世界地図は、一四〇二年、天台僧清濬の「混一疆理歴代都之図」、通称「混一疆理」である。その作成は李王朝創始当初からの国防が十分な認識されていたためと見做され、「東国輿地勝覽」の八道總図の基礎を形成した。そこで

注目されたのは、中国東北の黒龍江の溝まで朝鮮の領域として表示されており、白頭山は東へ偏在する形で鴨緑江は長く西へ流れていて、豆満江は東北に流れる小河となっている。この図も、後の「大東輿図」も、いわゆる中国地図表示方式といわれるもので表示されている⁽¹⁾。特に、妙香山は山形の図で表示され、その関心をみせている。南では、

図1 「混一疆理」の朝鮮



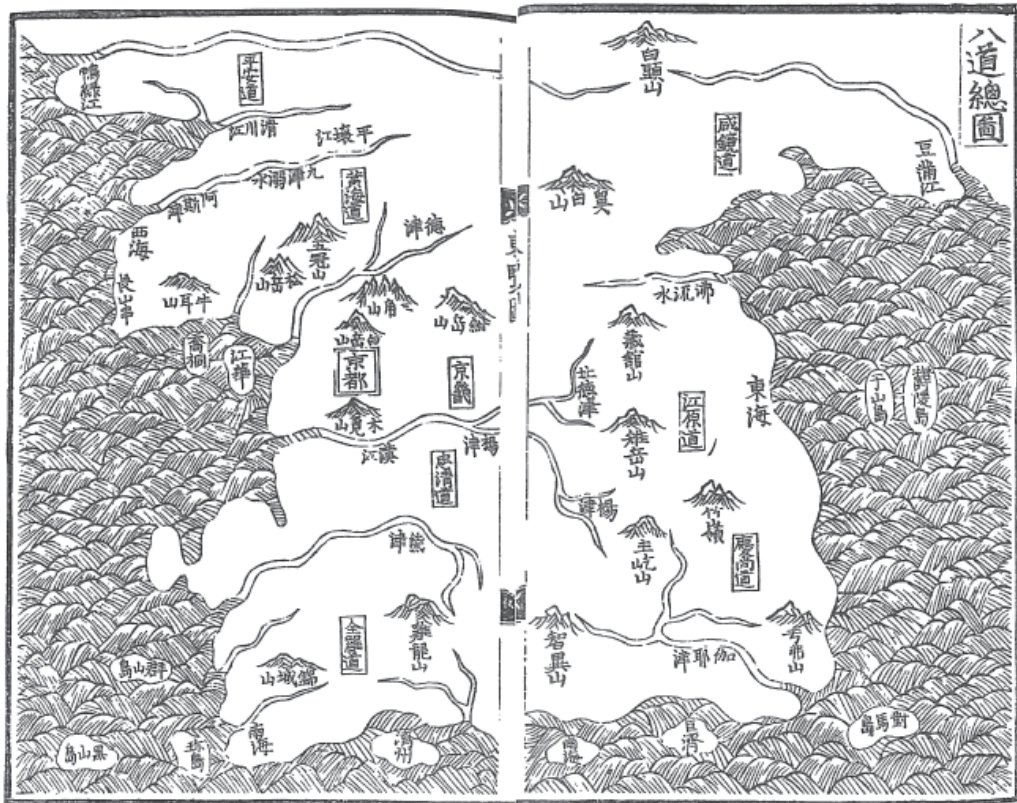
(出所) 龍谷大学所蔵の原図、張保雄による作図、張保雄「李朝初期、15世紀において製作された地図に関する研究」地理科学、第16号、1972年。

巨済島の南に対馬があり、さらに、図では、兵營と水營の配置が図示され、対外認識に立った作製がはっきりしている。⁽²⁾

それから六〇年、一四八一年に五〇巻が完成した八道總図の「東國輿地勝覽」では、半島の形態がより正確になっている。一四八六年に五五巻が刊行され、そこでは、鴨緑江と白頭山と豆満江がほぼ同一直線に配されている。⁽³⁾ その地図は実地踏査によるとされており、そこでは、科学的認識が深まっていた。⁽⁴⁾

中国朱子学の説く風水学説⁽⁵⁾に従うと、黄河に沿って黄海に至る中龍脈、長江に沿って東海に至るいまひとつの中龍脈、あるいは香港で龍穴を結び、台湾に至り再び龍穴を結ぶ南龍脈と並んで、朝鮮半島を通る北龍脈が指摘されている。中龍は、北京／北平で龍穴を結んで中国悠久の歴史と文化を生み出した。南龍は、太平洋の乱以後、旺運となり、現代の発展における原動力となっており、それは、香

図2 八道總図



(出所) 『新增東國輿地勝覽』京城、朝鮮史學會、1930年。

港・台湾における文化と経済の隆盛を築いたことにある。九龍は、大帽山から東南に伸びる主龍脈が九龍半島の主峰筆架山に発し、九本の龍脈に分かれ、九龍の名を残している。

朝鮮半島は、中華思想文化圏にあり、風水の理解にある。朝鮮総督府は、北岳山から流れ出る気脈を断つため、いかえれば朝鮮統治にある朝鮮人民の反抗を封じるために、その地に建設され、さらに、南山の朝鮮神社を朝鮮人民に対する威圧のためとした、と指摘されるのは、いずれも風水の説であり、その建物は現在、風水の故をもつていずれも完全に破壊され、排除されている。いうまでもなく、漢城、京城、ソウルの都市建設は、風水説に従っている^⑥。風水を踏まえたその具体的記述は、朝鮮最初の地理書、実学者李重煥『擇里志』（一七五〇年上梓）である^⑦。同書の八道総論は、以下の記述に始まっている。「八道総図」は、その朝鮮半島の位相を明確に

朝鮮半島の領土論争（浦野）

図3 中国三大龍と朝鮮・日本

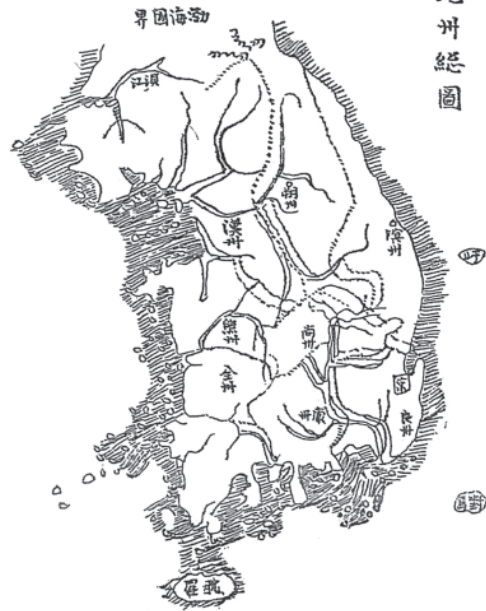


「地理人子須知」より

(出所) 徐善斷・徐善『地理人子須知——總論龍法・穴法・砂法・水法』台北、武陵出版、1985年の復刻。

図4 大東輿地全図

大東地志 総圖 全圖
九州総圖



良州 領州一小京一郡十三縣三十四停六部六
 尚州 領州一郡十縣三十四
 原州 領州一郡十一縣三十一
 熊州 領州一小京一郡十三縣三十一
 全州 領州一小京一郡十縣三十一
 武州 領州一郡十五縣四十三
 漢州 領州一小京一郡二十八縣六十九
 朔州 領州一小京一郡十二縣二十八
 溟州 領州一郡九縣二十九
 右州 九小京五郡一百二十縣二百九十七

大城郡 發榮府
 及梁郡 沙梁郡
 牟梁郡 本松郡
 韓陵郡 曹比郡

幽州 桂城

良州都督府 領
 中畿停西畿停北畿停莫耶停○商
 郡 領 鮮 顏 餘 稜 慈 仁 ○ 義 昌 郡 領 柁
 音 汁 大 臨 汀 髻 立 ○ 臨 臯 郡 領 道 因
 寧 迺 白 ○ 臨 闌 郡 領 東 津 河 曲 ○ 東
 ○ 東 萊 郡 領 東 平 機 張 ○ 義 安 郡 領
 提 ○ 密 城 郡 領 密 津 尚 藥 烏 岳 荆 山
 郡 領 約 章 ○ 大 王 郡 領 玄 駝 ○ 壽 昌
 濱 八 里 花 園

(出所) 金正浩『大東輿地圖』京城、京城帝國大学文學部、1936年／『大東地志』ソウル、漢陽大學附設國學研究院／亞細亞文化社、1976年。

物語っていて、本書は、国防上の必要性から、『新增東國輿地勝覽』（一五三〇年）などの成果を見直すべく、実学の第一人者により執筆された。李重煥は、朝鮮半島について、こう述べる。

「崑崙山の一脈は、大漠（タクラマカン砂漠・ゴビ砂漠）の南を行き、東は医巫閭山となる。これより大きく切断されて医巫閭山となる。これより大きく切断されて遼東平野となる。遼東平野を渡ると起きて白頭山となる。『山海経』にのべている不威山というのがこれである。

精気が北に千里走った所で、二つの川を挟んで南に向かい、寧古塔となる。南に一脈が抜き出て朝鮮山脈のはじめとなる。八道があつて、平安道は、瀋陽の隣りにある。咸鏡道は、女真と隣り合っている。つぎは江原道といい、咸鏡道を受けついでいる。黄海路というのは、平安道を受けつぎ、京畿道というのは、江原道と黄海道の南にある。京畿道の南は、忠清道および全羅道という。全羅道の東は、すなわち古新羅・卍韓・辰韓の地である。京畿道・忠清道・全羅道は、いにしへの馬韓・百濟の地であり、咸鏡道・平安道・黄海道は、古朝鮮の高句麗の地である。江原道は別途で、濊貊の地である。その興滅については、いまだにまびらかではない。唐末に太祖（王建）があらわれて三韓を統合して高麗となり、そして我が朝を継承することになった。……」⁽⁸⁾

北龍は、中国東北から朝鮮半島に至り、龍穴を結び、それは海を越えて日本で龍穴を結ぶ。この地帯を私も二〇〇五年に移動を重ね、その今までに見聞したことのない龍脈の穴の姿を目撃した。一八六一年李朝朝鮮の実学者・地理学者朝鮮人金正浩は「大東輿地全圖」を作成した。⁽⁹⁾それは朝鮮最大・最高の科学的実測図で、同地図は、興宣帝大院君に献上され、その精巧地図を見て、国家機密を漏らした廉で投獄されたとされているが、それは事実ではない。その地図には、以下の説明がある。「崑崙山に発源する三大幹龍の一つ（北條幹龍）は医巫閭山となり、脈から

発した遼東の平原となったあと、白頭山として隆起する。この白頭山こそ朝鮮の山脈の祖山であり、……。この地気の移動と王朝の盛衰の歴史観から、朝鮮では、その白頭山から発した脈は半島全域の生命体組織を形成し、その気のネットワークこそ、地域の存在を規定するところとなる。

金正浩にとつても、その半島とその付け根、中国東北吉林の朝鮮人地区にある朝鮮人社会に対する龍を制する中国遼寧省の医巫閭山の存在はキイとされる。その問題関心の地域は、現在、渤海史論争、そして高句麗史論争、さらに東北工程論争を生んでいる。一方、清国は、間島の支配をもつて龍の穴を押さえ、白頭山平原を制して、北朝鮮にその支配地を拡大した。鴨緑江は朝鮮の白頭山に発するが、その河川は中国が支配しており、北朝鮮の経済的窓口は依然、中国の支配にある。そして、この白頭山は、朝鮮民族の国神の降誕の地であり、また抗日闘争ゲリラの活動の地である。したがって、朝鮮民族の聖地である。朝鮮で風水が重視されるのは、朝鮮が中華文化圏にある以上に、風水の龍法で中国に対抗する意識がその歴史力学を形成してきているからである。本稿の主題をめぐる社会的・政治的・国際的考察は、すべてその射程のなかにある。

朝鮮の中華思想にある歴史認識には、反日ナショナリズムも底流している。北朝鮮は、任那日本府論争にみるように、朝鮮半島における日本の存在をすべて否定するところにある。そのためには、一九六三年朝鮮・中国国境条約にみるように、朝鮮は、中国との妥協、朝鮮半島における中国の存在を受け入れてきた。韓国も、その歴史認識において同調してきたが、現在、その歴史認識は朝鮮半島における国威認識の構図において独自の状況を形成している。そして、その文脈で竹島の占領、日本海呼称の拒否にみるように、その小中華主義の認識と主張は依然、強い。

- (1) 小川琢治『支那歴史地理研究』弘文堂書房、一九二八年。
- (2) 青山定雄「元代の地圖について」東方學報、東京第八冊、一九三八年。
青山定雄「李朝に於ける二三の朝鮮全圖について」東方學報、東京第九冊、一九三九年。
張保雄「李朝初期、一五世紀において政策された地図に関する研究」地理科学、第一六号、一九七二年。
- (3) 廬思慎・金旨直・李苻『新增東國輿地勝覽五五卷』上・中・下、京城、淵上書店、一九〇六年／『東國輿地勝覽』四冊、朝鮮群諸体系第六——一〇輯、京城、朝鮮古書刊行會、一九一二年／『東國輿地勝覽』／『新增東國輿地勝覽』三冊、京城、朝鮮史學會、一九三〇年／索引二冊を含む六冊、ソウル、景仁文化社。
末松保和編『東國輿地勝覽索引續編』京城朝鮮總督府中樞院、一九四〇年／科学院古典研究室編『新增東國輿地勝覽索引』平壤、一九六三年／鄭孝恒・他編・李李苻・他増訂、国書刊行會、一九八六年。
- (4) そこには、日朝交流の成果が反映されていた。
中村栄孝『日鮮關係史の研究』上・中・下、吉川弘文館、一九七〇年。
- (5) 風水は、中国古代思想に発し、ジョゼフ・ニードムも、『中國の科學と文明』一九〇〇—一九五年、第二卷吉川忠夫・他訳『思想史』思索社、一九七四年、三二二、四〇一—一五、四二二、四三四頁に、その意義が記述されている。それは、地理的特質に発し、天・地・生・人系統の整体有機循環を視點に、大地活体の理念に立脚している。千希賢・千桶編『中国古代風水的理論与实践——对中国古代風水的再認識』二冊、北京、光明日報出版社、二〇〇五年の記述は的確である。渡邊欣雄『風水氣の景觀地理学』人文書院、一九九四年は、風水を「氣」の景觀地理学と捉え、地人相關論に立つて諸相を描き出している。
さらに、以下をみよ。

竹島卓一「風水説と支那歴代の帝王陵」、米林富男編『東亞學』第二輯、日光書院、一九四〇年。

三浦國雄『中国人のトポス——洞窟・風水・壺中天』平凡社、一九八八年／『風水——中国人のトポス』平凡社、一九九五年。

三浦國雄『風水・曆・陰陽師——中国文化の辺縁としての沖繩』榕樹書林、二〇〇五年。

三浦國雄『風水講義』文春新書、文藝春秋、二〇〇六年。

渡邊欣雄『風水思想と東アジア』人文書院、一九九〇年。

渡邊欣雄・三浦國雄編『風水論集』環中国海の民俗と文化第四卷、凱風社、一九九四年——中国のみならず、韓国、琉球のみならず、インドシナのヤオ族、バリ人の風水事例を分析している。

李人『風水辞林秘解』台北、泉源出版社、一九九〇年。

李夢日『韓国風水思想史——時代別風水思想の特性』ソウル、明寶文化社、一九九一年。

坂出祥伸『中国古代の占法——技術と呪術の周辺』研文出版、一九九一年。

妙摩・慧度『中国風水術』北京、中国文聯出版公司、一九九三年。

詹石窗『道教風水學』台北、文津出版社、一九九四年。

牧尾良海『風水思想論考』山喜房佛書林、一九九四年。

辛侖柱『正統風水地理學原点——風水學教科書』三卷、ソウル、明堂出版社、一九九四年。

何曉昕、宮崎順子訳『風水探源——中国風水の歴史と実際』人文書院、一九九五年。

月清円訳『原書地理風水』基礎篇・応用篇、鴨書店、一九九五年。

J・J・M・デ・ホロト、牧尾良雄訳『風水——地霊人傑の思想』大正大学出版部、一九七七年／『中国の風水思想——古代地相術のバリエーション』第一書房、一九八六年。

小林祥晃『風水の奥義』廣濟堂、一九九五年。

崔昌祚、金在浩・洪谷鎮明訳『韓国の風水思想』人文書院、一九九七年。

崔昌祚、熊谷治訳『風水地理入門』雄山閣出版、一九九九年。

リリアン・トゥー、小林祥晃監訳『図説風水大全』東洋書林、一九九八年。

千田稔編『風水・精神・哲学』古今書院、一九九八年。

黄永融『風水都市——歴史都市の空間構成』学芸出版社、一九九九年。

一丁・雨露・洪涌編『中国古代風水与建筑選社』石家庄、河北科学技術出版社、一九九六年／台北、藝術家出版社、

一九九九年。

聶莉莉・韓敏・曾士才、西沢治彦編『大地は生きている——中国風水の思想と実践』てらいんく、二〇〇〇年。

加納喜光『風水と身体——中国古代のエコロジー』大修館書店、二〇〇一年。

渡邊欣也『風水の社会人類学——中国とその周辺比較』風響社、二〇〇一年。

漢寶徳『風水與環境』天津古籍出版社、二〇〇三年。

邵偉華『中國風水全書』拉薩、西藏人民出版社、二〇〇四年。

水口拓寿『風水思想を儒学する』風響社、二〇〇七年。

金基徳「韓国の風水思想」、賈鍾壽編訳『韓国伝統文化論』大学教育出版社、二〇〇八年。

(6) 朝倉敏夫「韓国の風水研究——その回顧と展望」、武田旦編『民俗学の進展と課題』国書刊行会、一九九〇年。

野崎充彦『韓国の風水師たち——今よみがえる龍脈』人文書院、一九九四年。

日本の朝鮮統治において朝鮮の風水研究が行われた。

村山智順『朝鮮の風水』京城、朝鮮總督府、一九三二年／ソウル、圓光大學民俗學研究所、一九七一年／ソウル、學文閣、

一九七二年／国書刊行会、一九七二年／崔吉城訳、ソウル、民音社、一九九〇年／龍溪書舎、二〇〇三年／ソウル。景仁文化

社、二〇〇五年。

(7) 李重煥『擇里志』星湖李瀛、一七五一年／金藤真鋤和解『朝鮮八城誌 全』漢城、日就社、一八八一年／崔南善編『擇里

志』京城、朝鮮光文會、一九二二年／朝鮮研究會『東國山水録』京城、青柳綱太郎、一九二四年／清水鍵吉

訳『八城誌』自由討究社、一九二二年／李翼成訳『擇里志』ソウル、乙酉文化社、一九七一年／『李重煥 擇里志』ソウル、

ハンギル社、一九九〇年／李泳澤訳『擇里志』ソウル、三中堂、一九七五年／梶井陟訳、成甲書房、一九八三年／許敬震訳

『擇里志』ソウル、漢陽出版社、一九九六年／『択里志——近世朝鮮の地理書』東洋文庫、平凡社、二〇〇六年。

韓活欣『星湖李瀛研究』ソウル、ソウル大学校出版部、一九八三年。

小石晶子「李重煥と『擇里志』」朝鮮学報、第一二五輯、一九八五年。

朴光用「李重煥の政治的一と『擇里志』著述」震檀學報、第六九輯、一九九〇年。

(8) 李重煥『捫里志——近世朝鮮の地理書』東洋文庫、平凡社、二〇〇六年、一三一—一六頁。

(9) 金正浩『大東輿地圖』京城、京城帝國大學文學部、一九三六年／『大東地志』ソウル、漢陽大學附設國學研究院／亞細亞文化社、一九七六年。

金正浩『輿圖備志』三冊、ソウル、韓國人文科學院、一九九一年。

金正浩『東輿圖』二冊、ソウル大學校奎章閣、二〇〇三年。

楊普景・洪谷鎮明「日本に所蔵される一九世紀朝鮮全図に関する書誌学的研究——『大東輿地全図』および関連地図を中心に」歴史地理学、第四五卷第四号、二〇〇三年。

「地図の上に路を作った 金正浩（キム・チョン補）の大東輿地図」Koreana、巻号二〇〇六、二〇〇六年。

3 領土の歴史論争

1 朝鮮半島をめぐる歴史論争

二〇〇四年七月日中国蘇州で開催された国連教育科学文化機関世界遺産委員会で、北朝鮮の平壤と南浦、及び中国東北の高句麗古墳群が同時に世界遺産として登録された。新華社は、この中国古墳群の存在に関して、七月二日「高句麗は歴代中国王朝と隷属関係を含む、王朝の制約と管轄を受けた地方政権であった」と報じ、さらに「強固な山城、雄大な陵墓、煌びやかな古墳壁画は、中国文化の重要な構成部分となっている」と述べた。人民日報も、二〇日「高句麗は漢・唐時代に中国東北にあった少数民族の政権であった」と報じた。北朝鮮は、この認識を受け入れた。この報道の朝鮮半島の三国時代における北朝鮮の高句麗に関する指摘に、百済と新羅が存在していたところの韓国が反発

した。それは、朝鮮民族のルーツにかかわる根源的な問題に関わっていたからであった。日本の関心の一つもそこにあった。

高句麗は、韓国史書『三国史記』の「高句麗本紀」に、始祖東明王が紀元前三七年に卒本川に都を創り、国号を高句麗と称し、その卒本川は現在の中国遼寧省丹東であった。^①高句麗は、四二七年平壤に遷都し、五世紀には中国東北にも跨る最大の国土を誇り、中国の国家、及び朝鮮半島中南部に出現した新羅及び百済と覇権を争った。韓国の歴史教科書『国史』（二〇〇四年）に、以下の通り、記述されている。

「引き続き対外膨張によって、高句麗は、東北アジアの覇者として君臨した。高句麗は、満州と韓半島にかけて広大な領土を占め、政治制度が完備した大帝國を形成し、中国と対等な地位で、力を争った。」

また、『三国史記——高句麗本紀』には、以下の記述がある。

「楊帝は、近習の重臣に「高句麗は異民族の小國であるのに、上國を侮辱している。いま（隋の方は）海を抜き山を移してなお余力があると思うほどである。ましてこの異民族など問題にするに足だろうか」といった。^②」

「楊帝は（高句麗）王に入朝するよう求めたが、王はこの勅命に従わなかった。（そこで楊帝は）將軍たちに勅命を出して、再び後退拳（討伐）をはかるよう命じたが、ついに実行されなかった。^③」

高句麗は、六六八年唐と新羅の連合軍によって滅亡した。高句麗は進んだ鉄器文化と騎馬軍団を有する軍事國家で、その古墳の壁画文化は評価が高く、その北朝鮮遺跡の壁画に描かれる高句麗人の貴人の姿は、奈良明日香村の高松塚古墳の壁画との比較においても注目されている。このことは、この五〜七世紀に、高句麗と日本との交流があったことを証拠づけている。この高句麗は、部族社会を統合して王が支配した國家であり、律令制度や法律体系、さらに古

墳壁画の文化において、独自の存在を誇った。⁽⁴⁾ 中国社会科学院では、一九九六年に「東北辺境歴史と現状の系列研究工程」（略称、東北工程）が着手され、その壮大な研究に対して、⁽⁵⁾ 韓国は強く反発した。そして、論争となり、⁽⁶⁾ 韓国政府は二〇〇四年春、高句麗研究を目的とする高句麗研究財団を設立し、研究は大きく進み、高句麗研究会報告『高句麗正体性』（二〇〇四年）、『韓国学界の東北工程対応論理』（二〇〇七年）が刊行された。⁽⁷⁾ さらに、二〇〇六年九月東北亜歴史財団が創設され、本格的な研究に入った。⁽⁸⁾

2 渤海史論争

渤海は、六九八年から九二六年にかけ、中国東北から朝鮮半島北部、そしてロシアの沿海地方にかけて存在した国家で、唐、新羅、日本との通交の要所にあった。『新唐書』によれば、本来、粟末靺鞨で、高句麗に従っていた。渤海は、遼東半島と山東半島の内側にあつて、黄河が注ぎ込む湾状の海域を指すが、初代国王大祚榮が河北省渤海郡の郡王に任ぜられたことで、その国の国号となった。六九〇年即位の武則天は遼寧に共生移住させられていた契丹の暴動に乗じて、粟末靺鞨人が高句麗の残党とともに、高句麗の故地に進出し、東牟山（延辺朝鮮族自治州敦化市）に震国を樹立し、七一三年大祚榮が唐に入朝し、渤海郡王に冊封され、その後、同国は著しい軍事膨張を続けた。

日本では、渤海史の主題は、交流史として注目されており、考古学研究を通じて満州史における歴史認識の主題を形成してきた。そうした渤海史研究のなか、北朝鮮では、渤海を高句麗を継承する国家として位置づけ、渤海史を新羅史と対置した。これに対して、韓国では、渤海史を南北朝時代の北国史として、韓国史に組み入れた。但し、李熙範『中世東北亞細亞史研究』は、渤海を高句麗の遺民によって建国された高句麗の復興国としつつも、それを韓国の体系史に組み入れるのは慎重であった。⁽⁹⁾

ここでもまた、近年、渤海の歴史的地位をめぐる、渤海国を朝鮮民族の王朝と見做すか、中国の少数民族による地方政権と見做すかをもって、韓国及び北朝鮮と中国の間で歴史論争となった。それを提起したのは、中国の東北工程の歴史観で、高句麗を継承して成立した渤海は、新羅と対立し南北時代を形成した朝鮮史観に対し、高句麗と同様に中国の中原国家の冊封関係にある地方政権に過ぎないとしている¹⁰。日本では、渤海を靺鞨人と高麗の遺民の国家であるとする説が有力である¹¹。

その東北工程は、鳥山喜一の渤海定説に直接に挑戦した。二〇一一年の東北亜歴史財団の報告『渤海對外關係史資料集成』は、渤海国の没落期における唐・新羅・渤海交渉と対立、渤海遺民と高麗関係などを論じて、渤海の国家存在を明らかにした¹²。

3 東北工程論争

高句麗史・渤海史研究の基礎を築いたのは南満州鉄道株式会社の東京支社に設置された満鮮歴史地理調査部で、その事業は、東京帝国大学文科大学に移管して実施した、白鳥庫吉・箭内互・松井等・稲葉岩吉らは、高句麗人・渤海人は北方ツングース民族、今日の韓族でないと認識し、朝鮮古代史の中心は新羅であるとした。それで、朝鮮総督府の朝鮮史編纂事業による刊行の『朝鮮史』には、渤海に関する記述はなかった。

中国の国家プロジェクトとして一九九七年に中国社会科学院中国边疆地史研究中心を母体に東北工程が着手され、二〇〇〇年以降、その成果が公表されるにいたった。その主要成果は、以下の通りであった。

馬大正「發展中国边疆史地研究几点思考」中国边疆史地研究、一九八八年第四期。

馬大正「中国古代边疆政策研究綜述」上・下、中国边疆史地研究、一九八九年第三期、一九八九年第四期。

馬大正主編『中国東北边疆研究』東北边疆研究、北京、中國社会科學出版社、二〇〇三年。

馬大正・李大龍・耿哲華・漢赫秀「古代中国高句麗歴史統論」東北边疆研究、北京、中國社会科學出版社、二〇〇三年。

耿哲華『好太王碑一千五百八十年祭』東北边疆研究、北京、中國社会科學出版社、二〇〇三年。

李大龍『漢唐藩属体制研究』東北边疆研究、北京、中國社会科學出版社、二〇〇六年。

張碧波「高句麗研究中的誤区」中国边疆史地研究、一九九九年第三期。

李德山「東北边疆和朝鮮半島古代国族研究」中国边疆史地研究、二〇〇一年第四期。

李德山・栾凡『中国東北古民族發展史』東北边疆研究、北京、中國社会科學出版社、二〇〇三年。

刁書仁「論明前記幹朵里女真与明、朝鮮的關係——兼論女真對朝鮮向凶們江流域拓展疆域的抵与鬭争」中国边疆史地研究、第一二卷第一期、二〇〇二年。

王曉菊『俄國東部移民開發問題研究』東北边疆研究、北京、中國社会科學出版社、二〇〇三年。

張鳳鳴『中国東北与俄國』東北边疆研究、北京、中國社会科學出版社、二〇〇三年。

李国強「東北工程」与中国東北史的研究」中国边疆史地研究、第一四卷第四期、二〇〇四年。

利淑英・耿哲華「兩漢時期高句麗的封国地位」中国边疆史地研究、第一四卷第四期、二〇〇四年。

楊郡『高句麗民族与国家的形成和演變』東北边疆研究、北京、中國社会科學出版社、二〇〇六年。

郝慶雲『渤海国史』東北边疆研究、北京、中國社会科學出版社、二〇〇六年。

馬大正編『中国東北边疆研究』はその集大成で、所収の姜維東「高句麗研究的若干問題」は、白鳥庫吉の「箕孤は

朝鮮の始祖に非ず」(一九一〇年)に対して、箕孤を完全に否定し、それは「朝鮮と中国の悠久の歴史的淵源を割断して」いるからである、と断定した。¹³ 姜維東は、さらに、白鳥庫吉の一八九四年以降の「檀君考」、「朝鮮古伝説考」、「朝鮮古代地名考」、「朝鮮古代王号考」、「高句麗の名称に就きての考」など満鮮史研究に対して、「朝鮮と中国の歴史・文化的関係を過小評価し、古朝鮮と満州・蒙古との関係を粉飾し、努めて朝鮮人の民族意識を宣伝強調し、「韓国の独立」と「満州の中立地区化論」を主張した」と論断した。この指摘は、歴史に対する妄言というほかはなからう。この白鳥庫吉の業績を集成した『満鮮史研究』は、漢民族中心の中国史に対して、満州・朝鮮における異民族支配が事実であったとするもので、その意味では、この地域の主体性を確認し、中国東北史・朝鮮史に新天地を開拓した意義があった。¹⁴ そこでは、日鮮満同源論も批判された。¹⁵

東北工程は、高句麗と渤海を中国の地方政権として扱い、遼寧省庄河県の高句麗城入口の石碑にある「國利民族是中國古代華夏民族大過程の一圓」、「高句麗政権是中國東北少数民族地方政権」の碑文をもって、『中国東北史』は、東北工程の研究成果を集成したものととして評価し、蔣蕪蕪・王小甫・他『中韓関係史』(一九九八年)における高句麗を中国王朝に対応するこれまでの朝鮮史の王朝記述は拒否され、¹⁶ 孫進己らの東北工程グループが「高句麗は歴代中国王朝と隷属の関係にあり、中原王朝の管轄にあった地方政権」とする公式見解をもって全面的に修正・変更し、そこでは、中国東北史は新しい次元の記述となり、¹⁷ それは渤海史論争にも発展した。¹⁸ その論争をめぐる韓国報道は、以下の経過を辿った。

「中国、「政府樹立前」韓国をHPから削除」朝鮮日報、二〇〇四年九月一七日。

「高句麗史、いつまで中国に引きずられるのか」朝鮮日報、二〇〇四年九月一七日。

【高句麗史歪曲】中国、「五項目の高等了解」順守確認」朝鮮日報、二〇〇四年九月二二日。

「中国遼寧省の石碑「高句麗は中華民族」」朝鮮日報、二〇〇五年二月二三日。

「中国の大学教材も高句麗・扶余は中国史の一部」朝鮮日報、二〇〇六年八月九日。

「東北工程」に沈黙する北朝鮮」朝鮮日報、二〇〇六年九月一〇日。

「東北工程——百済・新羅も「中国史の一部」」中国社会科学学院」朝鮮日報、二〇〇七年六月四日。

「韓国古代史研究の争点と韓国学界の研究水準」朝鮮日報、二〇〇七年八月二〇日。

「東北工程——高句麗史の歪曲やめない中国政府」上・下、朝鮮日報、二〇一一年九月一九日。

これに対する韓国の研究は、白山学界が早くから取り組んできたが、東北亜歴史財団を中心¹⁹に本格的に始まった²⁰。そして、韓国歴史教科書に高句麗史の記述が盛られるところとなった。

4 高句麗論争の争点

以下、高句麗論争をめぐる中国、韓国それぞれの立場を明記しておこう。

高句麗史を中国史の一部とする中国の見解

1、高句麗は、中国の中原王朝の統治秩序のなかで建設された。

高句麗が誕生した地域は、紀元前三世紀には燕の領域であり、秦が六国を統一した後は、秦の遼東外遼に属した。漢が紀元前一〇八年衛満朝鮮を滅亡させ、玄菟郡を設置した時点では、高句麗は玄菟郡高句麗県に属していた。紀元前三七七年に高句麗始祖朱蒙が高句麗の五部を統一しており、朝鮮とは直接関係はない。

2、高句麗は独立国家ではなく、中国の中央王朝の地方政権である。

高句麗の始祖朱蒙の建国以前の高句麗県、それまで東漢王朝に臣属していた。したがって、二二〇年から四三六年までの高句麗は、中央により高句麗・高句麗汪・征東大將軍・營輯刺史・樂浪郡公などの官職を授与され、朝貢関係にあった。

3、高句麗は、中国古代の一民族である。

高句麗が滅亡した後、高句麗の末裔は中原地域・突厥・渤海などに吸収され、朝鮮半島の大同以南の一部高麗陣は新羅に統合された。現在の朝鮮民族は、古代の三韓、即ち新羅人で、高句麗の末裔は少数に過ぎない。

4、隋・唐と高句麗の間の戦争は、中国の国内戦争である。

高句麗の領域は漢民族が支配していた地域であることから、隋・唐の高句麗との戦争は中国民族内部の統一戦争に過ぎない。

5、王氏高麗は高句麗を継承していない。

新羅の將軍、王建は新羅を滅亡させて高麗を建設したが、新羅の金氏王族を継承したもので、高句麗の高氏王族を継承していない。首都開城は新羅の旧領土であり、高句麗の旧領土ではない。王氏高麗は、新羅人と百濟人が建設したもので、高句麗の末裔が建設したものではない。王氏高麗は朝鮮の歴史であり、高句麗（高氏高麗）は中国人が建設した中国の歴史である。

6、したがって、朝鮮半島の北部地域は、中国の歴史に属する。

朝鮮半島の北部地域が朝鮮民族の居住地となったのは一五世紀以後のことで、五世紀に高句麗が首都を平壤に移しても、高句麗を朝鮮の歴史として論じられるものではない。平壤遷都以後、朝鮮の歴史ということはできないし、高

句麗が二つの国に分かれて所属することなどできない。五世紀以後の高句麗も、中国にあった地方政権であった。

唐は、大同江以南の地域を、新羅に割譲した。遼は、鴨緑江の東側の女真領土を、高麗に割譲した。明は、図門江(豆満江)以南の土地を、朝鮮に割譲した。現在の朝鮮国境北部は、朝鮮民族が勢力を拡張し形成したものである。

高句麗史を中国史ではないとする韓国の見解

1、高句麗は一貫して独立王朝を形成してきた。

高句麗は、中国東北地域及び朝鮮半島北部から中国の漢民族を消滅させ、半島の百済・新羅両王朝の形成を促し、朝鮮民族の形成に与った。

2、高句麗は、中国中原王朝に朝貢する時期があり、官職も授与されたが、それは前近代の外交的儀礼に過ぎず、他方、高句麗は、百済・新羅・倭国と国交関係にあり、高句麗と百済・新羅の存在とは本質的に区別がない。高句麗の独立期には、中国には一貫して中央政府のような統一政府は存在せず、高句麗は地方政権ではない。

3、高句麗が滅亡した後、高句麗の末裔は中国中原地域・投厥・渤海などに吸収され、高句麗人の一部が唐の強制移住によって中国内地に移住したものの、高句麗の故地に残された高句麗人は高句麗の復興運動を行い、その結果として渤海国が建設された。彼ら高句麗人は渤海と新羅に加わり、渤海の滅亡後は、その大多数が高麗に吸収され、現在の朝鮮民族を形成している。

4、高句麗が独立国家である以上、隋・唐と高句麗の間の戦争は国内戦争ではなく、国内戦争の論理は成立しない。

5、高麗が高句麗の復興運動を継承して建国されたものである以上、高麗王朝における高句麗の継承意識は明確で、国名を高麗としたのもそのためである。

6、箕子朝鮮・衛満朝鮮は、中国人が建設したとの伝承で、朝鮮半島北部を中国の歴史とする主張は成立しない。殷の箕子東来説である箕子朝鮮の建国説は伝承に過ぎない。燕の衛満朝鮮も中国の歴史とすることはできない。⁽²¹⁾

その争点である箕子朝鮮・衛満朝鮮の伝説が実際、どこまで有用であるかは議論が残る。議論の底辺にあるのは、現在の鴨緑江を中国・朝鮮国境とする現実の追認となっている。したがって、中国は、高句麗を中国高句麗といい、この中国古代史の朝鮮古代史への組み込みに反発が起きた。実際、中国東北地域と朝鮮半島に流入した中国人が深く関わり、漢四郡に中国人が存在したのも事実であるが、遼東に多数の朝鮮人が居住していたのも事実であり、それは高句麗の旧領土の三分の二が中国東北地域に残り、高句麗の歴史遺跡がそこに残っているためである。これに対して、四二七年の平壤遷都に立つて檀君神話をもつてする建国ナシヨナリズが発揚されたことで、その認識が混乱し、論争となった。そして、その論争は、中国・朝鮮国境の確認にまで、波及した。韓国は、朝鮮半島北部を支配していないが、憲法上はその管轄地域とされており、自国の国家存在の確認にかかわる争点としている。

なお、この論争には中華意識が大きく作用しており、日本をも巻き込んだ論争となった。そこでは、古代日本は、朝鮮半島から稲作など先進文化を学び発展させてきたという、いわゆる定説も覆された。半島最古の正史『三国史記』は、新羅を建設したのは、倭人・倭種であり、中国『隋書』にも、新羅も百済も倭国を文化大国として教仰していたことは明記されている。

さらに、韓国の数学者金容雲は少なくとも列島と半島は不分離であったが、百済の滅亡で双方は分離し、日本は、そこから成熟し、日本語と朝鮮語の間に突然の変移が生じ、音韻対応は消失したとしている。⁽²²⁾

5 檀君神話論争

この歴史論争の遠因は、一九九二年の中国・韓国为国交樹立が成功し、韓国では、分断された社会主義の北朝鮮の認識、そして北朝鮮と交流のあった中国朝鮮族への関心が現実には浮上したことにある。そして、民族の聖地、檀君建国神話の檀君の父君桓雄が地上に降り立った民族発祥の地、白頭山への登山が可能となり、その白頭山観光の拠点となった中国東北延吉市及び延辺朝鮮族自治州との民族的・文化的・経済的交流が深まった。これにより一九九〇年代を通じて檀君神話が韓国の歴史認識のなかに定着するところとなり、韓国の延辺観光客は、この地、いわゆる間島は古朝鮮で、高句麗、そしてそれを継いだ渤海の領土としてわが朝鮮民族の舞台であるとの認識を深め、朝鮮族に対する民族感情が大きく鼓吹された。それは民族問題としての間島問題の再浮上を意味した。

そこで、間島Ⅱ古朝鮮に対する明確な公式回答が提出されることとなった。この認識を確認したのは、馬大正編『中国東北边疆研究』所収の焦潤明「解決辺界争議的法理原則」で、「韓国が我が国領土に対する領土的野心をさらに露骨にした」上で、図們江流域の北岸を間島とし、長白山（白頭山の中国名）地区を李氏朝鮮発祥の地であると口実を付けて中国延辺地区を歴史上朝鮮の領域であるとする妄言を提出した、と論断した。それに対して、いわゆる北方領土論として、以下の韓国文献が刊行された。

申基碩 『間島領有権に関する研究』ソウル、探求堂、一九七九年。

俞政甲 『北方領土論——新しい時代精神・多勿精神』ソウル、法経出版社、一九九一年。

梁泰鎮 『韓国國境史研究』ソウル、法経出版社、一九九二年。

盧啓鉉 『高麗領土史』ソウル、甲寅出版社、一九九三年。

白山學會編『間島領有権問題論攷』ソウル、白山資料院、二〇〇〇年。

そして、檀君神話研究も取り組まれた⁽²³⁾。

焦潤明のかかる指摘は、以上の著者が歴史教科書の改修を要求し、中国東北部を「韓国の歴史的疆域の版図」を申し立て、古代史研究に混乱を引き起こしたことへの批判にあった。彼が、そこで指摘した誤謬六点は、以下にある⁽²⁴⁾。

1、いわゆる「朝鮮古類型人」を現代朝鮮人の直接の祖先としている。
2、「古朝鮮（箕氏朝鮮）」、高句麗の「朝鮮古類型人」の国内建設を朝鮮王朝とし、その領土を現代朝鮮領土として
いる。

3、戦国時期から隋唐時期、中国は朝鮮を侵略し、朝鮮国土に覇権を行使した。

4、渤海国は高句麗の直接の後継国で、朝鮮史は、南北王朝を形成した。

5、唐は渤海に対する侵略者で、清朝まで、中国歴代王朝は朝鮮に対する侵略者であった。

6、図們江流域北岸「間島」の長白山地区は李氏朝鮮の発祥地であって、延辺地区は朝鮮領土としている。

その韓国の歴史認識が、中国朝鮮族に拡大することで、中国としては、内政問題が噴出するところとなった。それは、後述する間島問題の再浮上となり、加えて、一九九三年平壤近郊、江東郡江東大朴山の檀君陵から檀君夫妻の遺骨が発見されたとの報道で⁽²⁵⁾、南・北朝鮮で檀君神話に呼応する動きが盛んになり、巨大施設の建設となった⁽²⁶⁾。

一九九三年の発掘調査で、高句麗時期の積石塚古墳であることが確認され、出土した古い一組の男女骨が年代測定で五〇一年±二六七年前と解析され、紀元前二五〇〇年の檀君紀元に遡ることが確認された。その遺跡は一九九四年一〇月竣工された。

この檀君陵の地名は、李氏朝鮮時代からのものである。⁽²⁷⁾

ここに「古朝鮮」が分断国家、北朝鮮と韓国、そして延辺朝鮮自治州の中国朝鮮族の間に、民族感情、民族一体性が強く鼓吹され、これに対し、中国当局は、それを非学術的な「一九九〇年代民族主義傾向」と非難し、檀君神話論争となった。⁽²⁸⁾

一九九九年一二月韓国で、在外同胞法が制定され、海外に居住しても、韓国に戸籍を有する者に対して韓国国籍を二重国籍として認めることとなった。この問題は、中国朝鮮族に対する中国の管理を難しくしたことは必然で、中国が反発し、同法は頓挫した。そして、二〇〇二年二月高句麗史を「中国史の一部」とした東北工程が登場した。

そこでの、『三国遺事』の「古朝鮮」にある檀君神話は、以下の通りである。⁽²⁹⁾

「古記にいうには、むかし恒因（帝釈をいう）の庶子、恒雄はつねづね天下に対して関心をもち、人間世界を欲しがっていた。父は子供の気持を察して、下界の三危太白（三危は三つの高い山、太白はその中の一つ）を見おろしてみると、（そこは）人間をひろく利するに十分であったので、（その子に）天符印三個を与え、降りて行って（人間世界を）治めさせた。（そこで）恒雄が部下三千を率いて太伯山の頂上（太伯は今の妙高山）の神壇樹の下に降りてきて、そこを神市と読んだ。この人が恒雄天王である。（彼は）風伯・雨師・雲師らを従えて、穀・命・病・刑・善・悪を司り、あらゆる人間の三百六十余のことからを治め、教化した。

時に一頭の熊と一頭の虎とが同じ穴に住んでいて、神雄（恒雄）に祈っているには、「願わくば化して人間になりとうございます」と。そこで、あるとき恒雄は霊妙な艾ひとにぎりど、蒜二十個を与えて「お前たちがこれを食べて百日間日光を見なければ、すぐに人間になるだろう」といった。熊と虎がこれをもらって食べ、物忌み

すること三七日（二十一日）に、熊は変じて女の身となったが、虎は物忌みができなくて人間になれなかった。熊女は彼女と結婚してくれるものがいなかったの、いつも神（壇）樹の下で、みごもりますようにと祈った。恒雄がしばらく身体を変えて（人間となって）結婚し、子を産んだ。名前を壇君王儉といった。

（王儉は）唐高堯が即位してから五十年たった虎寅（唐高の即位元年は戊辰であり五十年は丁巳であって、庚寅ではない）に、平壤城（今の西京）に都に移し、はじめて朝鮮と呼び、その都を白岳山の阿斯達に移した。そこを弓（方とも書く）忽山、または今弥達ともいう。国を治めること一千五百年間であった。³⁰」

かくして、檀君は古朝鮮国を開き、その始祖となった。檀君は多くの民を率い白頭山の麓の阿斯達に降り、王儉城に都を定め一五〇〇年もの間、国を治めた。ここでいう太伯山は白頭山で、但し、桓雄が降りたところは、北朝鮮平安北道（道都新義洲）の妙高山脈の妙高山という説もある（前記、「古朝鮮」の翻訳者はその一人、訳者の壇はそのままである）が、白頭山であると多くの人が信じている。

6 任那日本府論争

四世紀中頃から六世紀半ばまで、ほぼ二〇〇年間、日本は朝鮮半島南部に進出し、植民地的経営を行っていた、その地域が任那で、それはその小国の名である。日本の半島関与は、一〇八年設置の樂浪郡への貢献及び貿易にあり、樂浪郡は北方から下ってきた高句麗族によって滅ぼされ、樂浪郡から分離して日本との関係を維持した帶方郡は南方の韓族、東方の濊族によって滅ぼされた。そこで、百済国、新羅国が成立したものの、日本の間接支配は続いた。日本は遣唐使の往来を続けたが、その背景には任那の存在があったからである。なお、任那は釜山の地方にあったとき、任那一〇国は、次の諸国である。安羅国（咸安）、加羅国（高靈）、斯二岐（宣寧郡新反里）、多羅国（陝川）、卒麻国

（性林面馬沙里）、古嗟国（固城）、巳他国（居晶）、散半下国（草溪）など。

日本は、四世紀に成立した大和が朝鮮半島に進出し、そこに任那日本府を置いた。二〇〇一年扶桑社中学歴史教科書『新しい歴史教科書』にその記述が登場した。既に一九六三年九月二〇日朝鮮民主主義人民共和国科学院歴史研究所所長金錫亨と金熙一・孫英鐘は、労働新聞論文「『世界通史』の朝鮮に関する叙述の重大な錯誤に関して」で、任那日本府の存在を否定した。同論文は、一九五五年ソ連科学アカデミー編の『世界通史』の関連もあつて、一〇月一八日人民日報に掲載された。しかし、その中国側の掲載の意図は、金錫亨らは、任那日本府は日本帝国主義の御用学者が日本の朝鮮占領の歴史を擁護するために捏造したとする北朝鮮の見解に対する反論にあつた。さらに、金錫亨らは、任那だけでなく、新羅、百濟、告馬（高句麗）など、『日本書紀』に記されている諸国も、日本列島内に存在した朝鮮系「分国」とされる分国説を主張しており、これら分国と日本列島内の土着勢力を統御し掠奪するために大和王が列島内に設置した機関としていた³¹。これに、村山正雄が反論した³²。

これを機に、南・北朝鮮の歴史学者は、任那日本府の抹殺の走り、任那日本府は、任那に存在した大和国の通商事務所に過ぎないと断定した。こうして、中国正史『三国志』、『宋国』、『隋書』、『北史』、さらに『三国史記』、『三国遺事』、あるいは金石文史料の「高句麗広開土王碑文」などの任那日本府の記述を、すべて否定した。これに対して、中国延辺大学の善春元は、マルクス主義国家学説に忠実に立脚して挑戦して、北朝鮮史学界は「荒唐無稽」にあると論評した³³。日本古代史学界では、鈴木英夫らの「任那日本府」史観の検証が進んだ³⁴。

平壤近郊至るところに分布する古墳群は、例外なく中国の円頂方台封漢墓と完全に一致している。出土品は、いずれも漢王朝の製造品で、中国朝廷が樂浪郡に派遣した太守の行員や漢人官吏の印章（封泥）も、多数出土している。

北朝鮮史学界は、平壤を中心とする樂浪郡は朝鮮半島には所在せず、中国東北遼河下流域に位置していた、と主張した。これは、任那日本府の所在地を朝鮮半島から日本列島に置き換えた捏造と同じ手法である。一方、韓国では、一九七〇年、ソウル大学教授韓ユウキンは『韓國通史』で、任那日本府は否定されていた。それは、日本人に対する屈辱を日本の存在を拒否することで、正当づける手法であった。³⁵ 現在、韓国の歴史学会は、この解釈の立場を停止した向きがある。依然、任那符論争は続いている。³⁶

(1) 青柳綱太郎編『三國史記——原文和譯對照』上・下、京城、朝鮮研究會、一九一四年／金富軾『三國史記』六冊、東京帝國大學文學部東洋史學科、一九二五—二六年／朝鮮史學會編、京城、朝鮮史學會、一九二八年／京城、近藤書店、一九四一年／國書刊行會、一九七一年／學習院東洋文化研究所、一九六四年／金鍾權譯『完譯三國史記——附・原文』ソウル、先進文化社、一九六〇年／ソウル、景仁文化社、一九六九年／二冊、ソウル、太陽書籍、一九七二年／民族文化推進會編『三國史記』ソウル、民族文化推進會、一九七三年／林英樹訳、三冊、上卷新羅本紀・中卷高句麗本紀・百濟本紀・下卷雜志・列傳、三一書房、一九七四—七五年／辛鎬烈訳、ソウル、東西文化社、一九七六年／李兵燾訳、上・下、ソウル、乙酉文化社、一九八三年／金思燁訳、明石書店、一九九七年／鄭求福・他訳『譯註三國史記』城南、韓國精神文化研究院、一九九九年／井上秀雄訳『三國史記』四冊、東洋文庫、平凡社、二〇〇六年。

金富軾、鈴木武樹訳『三國史記——倭國關係』大和書房、一九七五年。

佐伯有清編訳『三國史記倭人伝・他六篇』朝鮮正史日本伝第一卷、岩波文庫、一九八八年。

書景文化社編『三國史記の新研究』慶州、新羅文化宣揚會、一九八一年。

申澄植『三國史記研究』ソウル、一潮閣、一九八一年。

金聖吳『沸流百濟と日本の国家起源——「三國史記」・「日本書記」の一元的復原を中心とした』ソウル、知文社、一九八二年。

黛弘道編『古代国家の歴史と伝承』吉川弘文館、一九九二年。

高寛敏『『三国史記』の原典的研究』雄山閣出版、一九九六年。

鄭大均・古田博司編『韓国・北朝鮮の嘘を見破る——近代史の争点三〇』文春新書、文藝春秋、二〇〇六年。

横山和子『日本古代史の解明に挑む——『古事記』『日本書紀』『三国史』から読み解く』丸善岡山支店サービスセンター、二〇〇八年。

室谷克実『日韓がタブーにする半島の歴史』新潮新書、新潮社、二〇一〇年。

(2) 井上秀雄訳『三国史記——高句麗本紀』東洋文庫、平凡社、二〇〇六年、一九三頁。

(3) 前掲書、一九六頁。

(4) 片野次雄『戦乱の朝鮮三国』誠文堂新光社、一九八五年／『戦乱三国の 코리아史——高句麗・百済・新羅の英雄たち』彩流社、二〇〇七年。

李殿福・孫玉良、姜仁求・金瑛洙訳『高句麗簡史』ソウル、三省出版社、一九九〇年。

申澄植『集安高句麗遺跡の調査研究』ソウル、國史編纂委員會、一九九六年。

孔錫龜『高句麗領域擴張史研究』ソウル、書景文化社、一九九八年。

琴京淑『高句麗前期政治史研究』ソウル、高麗大學校民族文化研究院、二〇〇四年。

劉炬・付百臣・他『高句麗政治制度研究』香港、香港亞洲出版社、二〇〇八年。

金鎮漢『高句麗後期對外關係史研究』ソウル、韓國學中央研究院韓國學大學院、二〇一〇年。

(5) 楊枝春吉・耿鉄華主編『高句麗歴史与文化研究』長春、吉林文史出版社、一九九七年。

魏存成『高句麗遺迹』北京、文物出版社、二〇〇二年。

厉声・朴文一主編『高句麗歴史問題研究論文集』延吉、延边大学出版社、二〇〇五年。

姜維恭『高句麗歴史研究初編』長春、吉林大学出版社、二〇〇五年。

李春祥『高句麗与東北民族疆域研究』長春、吉林文史出版社、二〇〇六年。

李国強・李宗勛主編『高句麗史新研究』延吉、延辺大学出版社、二〇〇六年。

(6) 山本勇二「高句麗をめぐる中韓歴史論争」海外事情、二〇〇四年九月号。

下條正男「高句麗歴史論争と間島問題」海外事情、二〇〇四年一二月号。

(7) 高句麗研究会編『高句麗國際關係』ソウル、學研文化社、二〇〇二年。

高句麗研究会編『高句麗正體性』ソウル、高句麗研究会、二〇〇四年。

高句麗研究会編『韓國學界の東北工程對應論理』ソウル、高句麗研究会、二〇〇七年。

(8) 『東北アジアの歴史和解に向けての大きな一歩』ソウル、東北亞歴史財團、二〇〇九年。

(9) 主栄憲「渤海文化」考古民俗、一九六六年二月号。

主栄憲「渤海中京顯徳府について」考古民俗、一九六六年二月号。

主栄憲「渤海は高句麗の継承者」考古民俗、一九六七年二月号。

李熙範『中世東北亞細亞史研究』ソウル、東國大學校韓國學研究所／亞細亞文化社、一九七五年。

浜田耕策「渤海史をめぐる朝鮮史學界の動向——共和国と韓国の「南北朝時代」論について」朝鮮學報、第八六輯、一九七八年。

(10) 孫進己・孙海主編『高句麗・渤海研究集成』六冊、哈爾濱、哈爾濱出版社、一九九四年。

第一卷／第三卷 「高句麗卷」一・二・三。

第三卷／第六卷 「渤海卷」四・五・六。

(11) ①鳥山喜一・他『渤海史上の諸問題』風間書房、一九六八年。

森安孝夫「渤海から契丹へ」、『東アジア世界における日本』古代史講座第七卷、学生社、一九八二年。

三上次男『高句麗と渤海』吉川弘文館、一九九〇年。

李殿福・他『高句麗・渤海の考古と歴史』学生社、一九九一年。

上田雄『渤海国の謎——知られざる東アジアの古代王朝』講談社現代新書、講談社、一九九二年。

- 上田雄『渤海国』講談社学術文庫、講談社、二〇〇四年。
- 森田悌「渤海の狩猟について」弘前大学國史研究、第九四号、一九九三年。
- 方學鳳主編『渤海史研究』四冊、延吉、延边出版社、一九九三年。
- 韓圭哲『渤海の對外關係史——南北朝の形成と展開』ソウル、新書苑、一九九四年。
- 朱国忱・魏国忠、佐伯有清・浜田耕策訳『渤海史』東方書店、一九九六年。
- 魏国忠・朱国忱・趙哲夫『謎中王国探秘——渤海国考古散記』濟南、山東畫報出版社、一九九九年。
- 濱田耕策『渤海国興亡史』吉川弘文館、二〇〇〇年。
- 石井正敏『日本渤海關係史の研究』吉川弘文館、二〇〇一年。
- 紀勝利・郝慶雲「渤海国初の際国号考」中国边疆史地研究、第一四卷第二期、二〇〇四年
- (12) チャンジェジン、キムジョンボク、イムソクキュ『渤海對外關係史資料集成』ソウル、東北亞歴史財團、二〇一一年。
- (13) 姜維東「高句麗研究的若干問題」、馬大正編『中国東北边疆研究』東北邊疆研究、北京、中國社会科學出版社、二〇〇三年、一五一頁以降。
- (14) 白鳥庫吉「檀君考」學習院輔仁會雜誌、第二八号、一八九四年。
- 白鳥庫吉「朝鮮古傳説考」史學雜誌、第五編第一二号、一八九四年。
- 白鳥庫吉「朝鮮古代諸國名稱考」史學雜誌、第六編第七・八号、一八九五年。
- 白鳥庫吉「朝鮮古代地名考」史學雜誌、第六編第一〇・一一号、第七編第一号、一八九五—九六年。
- 白鳥庫吉「朝鮮古代王號考」史學雜誌、第七編第二号、一八九六年。
- 白鳥庫吉「高句麗の名稱に就きての考」國學院雜誌、第二卷第一〇号、一八九六年。
- 白鳥庫吉「箕孤は朝鮮の始祖に非ず」東京日日新聞、一九一〇年八月三一日。
- 白鳥庫吉『朝鮮史研究』白鳥庫吉全集第三卷、岩波書店、一九七〇年／『朝鮮史研究』岩波書店、一九八六年。
- (15) 喜田貞吉「日鮮兩民族同源論」民族と歴史、第六卷第一号、一九二二年七月。

金澤庄三郎『日鮮同祖論』京城、汎東洋社／刀江書院、一九四三年／成甲書房、一九七八年。

河野六郎「日本語と朝鮮語の二三の類似」、八學會連合編『人民科學の諸問題——協同研究課題『稻』』關書院、一九四九年。
本山美彦『韓国併合と同祖神話の破綻——「霧」の下の修羅』御茶の水書房、二〇一〇年。

(16) 蔣蕙蕙・王小甫・他『中韓關係史』三冊、古代卷・近代卷・現代卷、北京、社会科学文献出版社、一九九六—一九八八年——蔣蕙蕙・王小甫・翁天兵・趙冬海・張帆・徐万民は、古代卷の執筆者である。

(17) 孫進己『女真史』長春、吉林文史出版社、一九八七年。

孫進己・他編『契丹史論著汇编』二冊、瀋陽、北方史地資料編委員會、一九八八年。

孫進己・他主編『東北歷史地理』二冊、哈爾濱、黑龍江人民出版社、一九八九年。

孫進己・郭守信編『東方古史資料叢編』瀋陽、遼瀋書社。

第一卷『先秦・三國』一九八九年。

第二卷『兩晉（ム）・隨』一九八九年。

第三卷『唐』一九九〇年。

第四卷『遼』一九九〇年。

孫進己・孫海主編『高句麗・渤海研究集成』六冊、哈爾濱、哈爾濱出版社、一九九四年。

第一卷（第三卷）『高句麗卷』一・二・三。

第三卷（第六卷）『渤海卷』四・五・六。

孫進己・孫泓『女真民族史』桂林、廣西師範大學出版社、二〇一〇年。

孫進己・孫泓『契丹民族史』桂林、廣西師範大學出版社、二〇一〇年。

佟冬主編『中国東北史』長春、吉林文史出版社、一九八七年。

佟冬主編『中国東北史』六冊、長春、吉林文史出版社、一九九八年、修訂版二〇〇六年。

(18) そこでの南北朝鮮の反応は異なる。濱田耕策「渤海史をめぐる朝鮮史学会の動向——共和国と韓国の「南北朝時代」論に

ついで「朝鮮学報、第八六号、一九七八年。

- (19) 李丙壽『韓国古代史』上・下、一九七九年／金思燁訳『韓国古代史』ソウル、金思燁全集刊行委員会／国書刊行会、二〇〇四年。

白山資料院編『韓民族の大陸關係史』ソウル、白山資料院、一九八七年。

白山資料院編『韓國考古學關係中國資料選集』六冊、ソウル、白山資料院、一九九四—一九九七年。

第一卷考古學報編、第二卷文物編、第三卷考古編上・下。

『國際教科書研究所編『韓・日歴史教科書修正の諸問題』ソウル、白山資料院、一九九四年。

檀國代史學會編『韓國古代史』三冊、ソウル、學研文化社、一九九四年。

朴性鳳編『高句麗南進經營史の研究』ソウル、白山資料院、一九九五年。

金鍾潤『新講韓國古代史——半島史學を全面拒否する』ソウル、東信出版社、一九九五年。

白山學會編『古朝鮮史——研究』白山資料院、一九九五年。

白山學會編『高句麗史——研究』白山資料院、一九九五年。

白山學會編『朝鮮時代北方關係史論攷』二冊、白山資料院、一九九五年。

白山學會編『百濟・新羅・伽倻史研究』ソウル、白山資料院、一九九五年。

白山學會編『韓國の民族文化起源』ソウル、白山資料院、一九九五年。

白山學會編『韓国古代語と東北アジア』白山資料院、二〇〇一年。

李仁哲『高句麗の對外征服研究』ソウル、白山資料院、二〇〇〇年。

- (20) 韓国東北亞歴史財団編、中国延辺大學訳『東北工程相關韓國學者論文選』首尔、東北亞歴史財團、二〇〇七年。

余吳奎「中國學界の高句麗對外關係史研究狀況」。

金貞培「中國史書中出現的『海東三國』」。

李仁哲「中國的高句麗歸屬問題研究分析」。

- 金一權「中國學界對高句麗國家祭祀的研究分析」。
- 金貞姬「渤海史的歸屬問題與唐代羈縻府輯制度」。
- 尹戴雲「渤海的主權與對中貿易」。
- 朴龍雲「高麗時期人間の高麗繼承高句麗意識」。
- 尹榮寅「中國學界關於蒙古與漢族關係的研究動態——以近十年蒙古(元)帝國民族關係史研究為中心」。
- 裴城溶「中國的朝、清國境問題研究動態」。
- 崔德奎「中國關於中蘇國境運送的研究動態」。
- 張世胤「中國朝鮮族的現況與展望——以二〇世紀九〇年代以後為中心」。
- 尹輝鐸「當代中國的邊疆政策——以東北振興戰略為中心」。
- 東北亞歷史財團編『東北亞閩系史性格——東北亞歷史財團・北京大學共同學術會議』首尔、東北亞歷史財團、二〇〇九年。
- 鄭夏賢「《三国志・魏志・東夷傳》中的世界視」。
- 羅新「高句麗兄系官職的内亞淵源」。
- 金鉉球「白村江之戰與東北亞國際關係的變化」。
- 李志生「从西安地區唐代喪葬模式看渤海貞惠和貞孝」。
- 金塘譯「高麗與遼・金・元關係史的特性」。
- 徐凱「八旗滿洲高麗家族与清初戰爭」。
- 李泰勳「从朝鮮の中華主義の到韓清条約」。
- 党宝海「試論《至正条格》の性質及影響」——元朝の大元通交制關係を主題とする。
- 裴京漢「二〇世紀初韓中之間的相互認識」——韓国人の孫文理解が主題である。
- 王元周「近代中韓關係變化的理想与現實——韓国人對中國否定認識的歷史根源」——北伐論から北方史觀までを主題としている。

- (21) 鈞光林「高句麗史の帰属をめぐる韓国・朝鮮と中国の論争」新潟産業大学人文学部紀要、第一六号、二〇〇四年。
- (22) 金容雲『韓国数学史』槇書店、一九七八年。
- 金容雲『韓国人と日本人』サイマル出版会、一九八三年。
- 金容雲『鎖国の汎パラダイム』サイマル出版会、一九八三年。
- 金容雲『日韓民族の原型』サイマル出版会、一九八六年。
- 金容雲『訪れる没落』情報センター出版局、一九八八年——原本には「原型史観の韓国」の副題がある。
- 金容雲『日本の喜劇』情報センター出版局、一九九二年。
- 金容雲『「かしこ型」日本人と「かちき型」韓国人』学生社、一九九四年。
- 金容雲『日本語の正体』三五館、二〇〇九年。
- 金容雲『日本Ⅱ百済』説』三五館、二〇一一年。
- (23) 今西龍「檀君考」、『朝鮮古史の研究』国書刊行会、一九七〇年。
- 龍賢鍾「檀君神話」、韓國文化藝術振興院編『民族文學體系』ソウル、同和出版社、一九七五年。
- 孫仁銖『研究方法・檀君神話・花郎道の教育思想』韓國教育思想史第一巻、ソウル、文音社、一九八九年。
- ソ・ヨンデ『北韓學界の檀君神話研究』ソウル、白山資料院、一九九五年。
- 白山資料院編『檀君神話研究』ソウル、白山資料院、一九九五年。
- 大阪経済法科大学『檀君と古朝鮮』大阪経済法科大学、一九九九年。
- (24) 焦潤明「解決辺界争議的法理原則」、馬大正編『中国東北边疆研究』東北邊疆研究、北京、中國社会科學出版社、二〇〇三年、三〇頁以降。
- (25) 「北朝鮮はいま 現代のピラミッド 代わらぬ巨大志向」毎日新聞、一九九四年一〇月一三日。
- 「金書記、「推戴」段階 檀域陵視察、「待望」の雰囲気創り——北朝鮮の権力継承」毎日新聞、一九九四年一月二日。
- (26) 金成煥編『日帝強占期檀君陵修築運動』ソウル、景仁文化社、二〇〇九年。

- (27) 田中俊明「檀君陵」、田中俊明編『韓国の歴史——先史から現代』昭和堂、二〇〇八年、四九―五〇頁。
- (28) 馬大正・耿哲華・權赫秀『古代中国高句麗歴史統論』北京、中國社会科学出版社、二〇〇三年、八頁。
- (29) 『三國遺事』は、高句麗、新羅、百濟三國の遺聞逸事を高麗の高僧一然が晩年に記した朝鮮古代研究の基本資料で、李朝中牟大(一五〇六―四四年)の慶州版が流布しており、王暦の年表をそれぞれの巻頭におき、紀異第一、紀異第二、興法、塔像、義解、神呪、感通、避隱、孝善の九編の構成で、興法以下は仏教関係記事である。
- 一然撰『三國遺事』五冊、京都帝國大學文學部、一九二一年／平岩佑介訳、自由討究社、一九二三年／朝鮮史學會、一九二八年／朝鮮史學會編、国書刊行会、一九七一年／李丙燾訳、ソウル、東國文化社、一九五六年／李丙燾訳、韓國思想大思想全集第四卷、ソウル、良友堂、一九九四年／ソウル、東國文化社、一九五六年／学習院大學東洋文化研究所、一九六四年／李戴培訳、二冊、ソウル、光文出版社、一九六七年／李戴培訳、二冊、ソウル、明知大學出版部、一九七五年／ソウル、東方文化書局、一九七一年／李東歡訳、二冊、ソウル、三中堂文庫、三三書房、一九七五年／金思燁訳『三國遺事・完訳』朝日新聞社、一九七六年／金思燁訳『完訳三國遺事』明石書店、一九八〇年／金思燁訳『完訳三國遺事』金思燁全集第二五卷、ソウル、金思燁全集刊行委員会／国書刊行会、二〇〇四年／李民樹訳、二冊、ソウル、三星美術文化財團、一九七九年／李民樹訳、世界思想教養全集續第二二卷、ソウル、乙酉文化社、一九七三年／李民樹訳、世界思想全集第八卷、ソウル、乙酉文化社、一九八三年／權相老訳、ソウル、東西文化社、一九七七年／釜山、民族文化、一九八四年／『原本三國史記・三國遺事』ソウル、大堤閣、一九八七年。
- 韓國精神文化研究院古典研究室編『三國遺事索引』ソウル、韓國精神文化研究院、一九八〇年。
- 三品彰英遺撰『三國遺事考証』上・中・下・二・三計五冊、塙書房、一九七五―九五年。
- 韓國精神文化研究院国際協力室編『三國遺事の総合的検討』ソウル、韓國精神文化研究院、一九八七年。
- 嶺南大學校民族文化研究所編『三國遺事研究』ソウル、嶺南大學校出版部、一九八一年。
- 白山資料院編『三國遺事研究論選集』白山資料院、一九八六年。
- (30) 一然撰、金思燁訳『完訳三國遺事』明石書店、一九八〇年。

- (31) 李弘植「日本書記」所載 高句麗關係記事考」東方學志、第一号、第三号、一九五四年／『韓国古代史の研究』ソウル、新丘文化社、一九七一年／加盟輝一郎訳、井上秀雄・旗田巍編『古代日本と朝鮮の基本問題』學生社、一九七四年。
- 金錫亨、村田正雄・都竜雨訳「三韓三国の日本列島内分国について」歴史科学、第一号、一九六三年／朝鮮研究、第七一号、一九六八年／朴鐘鳴訳、井上秀雄・旗田巍編『古代日本と朝鮮の基本問題』學生社、一九七四年。
- 金錫亨「天孫降臨神話を通じてみた駕洛人たちの日本列島への進出」歴史科学、一九六五年第三号／朴鐘鳴訳、井上秀雄・旗田巍編『古代日本と朝鮮の基本問題』學生社、一九七四年。
- 鄭仲煥「日本書記」に引用された百濟三書について」亞細亞學報、第一〇号、一九七二年／泊勝美訳、井上秀雄・旗田巍編『古代日本と朝鮮の基本問題』學生社、一九七四年。
- 朝鮮民主主義人民共和国社会科学院歴史研究所編『朝鮮全史』第二卷、平壤、科学・百科辞典出版社、一九七九年、一二二頁。
- (32) 村田正雄「百濟の大姓八足について」、山本博士還曆記念東洋史論叢編纂委員會編「東洋史論叢——山本博士還曆記念」山川出版社、一九七二年／旗田巍・井上秀雄編『古代の朝鮮』學生社、一九七四年。
- (33) 全春元「論邪馬台国的社会性質」延辺大学学報、社会科学、一九八六年第二期／「邪馬台国的社会性質を論ず——日中史学界の専門家の論説を検討しながら」歴史評論、第四四〇号、一九八六年一二月。
- 全春元「関于日本早期国家形成的異議」歴史教学、一九九〇年第七期。
- 全春元・方學『中朝日關係史』延吉、延辺大学出版社、一九九四年。
- 全春元「早期東北亜文化圈中心的朝鮮」延辺大学学報、社会科学、一九九五年第四期。
- 全春元『韓民族——東北亜歴史へ及ぼす影響』ソウル、集文堂、一九九八年。
- 全春元「任那日本府」歪曲に見る北朝鮮史学会の荒唐無稽」正論、二〇〇七年二月号。
- (34) 末松保和『任那興亡史』大八洲出版、一九四九年／吉川弘文館、一九五六年。
- 末松保和『古代の日本と朝鮮』末松保和朝鮮史著作集第四号、吉川弘文館、一九九六年。
- 請田正幸「六世紀前期の日朝關係——任那「日本府」を中心として」、『古代朝鮮と日本』朝鮮史研究会論文集、第一一号、

- 一九七四年／『古代朝鮮と日本』龍溪書舎、拡充版一九七四年。
- 小野寺直日『任那日本府への史観』日本及び日本人、一九七七年七月号。
- 井上秀雄『任那日本府と倭』東出版、一九七三年／東出版事業社、一九七八年。
- 金廷鶴『任那と日本』日本の歴史別巻一、小学館、一九七七年。
- 廬泰敏「三韓国についての認識の変遷」ソウル、韓國史研究、第三八号、一九八二年。
- 鈴木英夫「任那の調」の起源と性格」国史学、第二一九号、一九八二年三月。
- 鈴木英夫「加耶・百濟と倭——「任那日本府」論」朝鮮史研究会論文集、第二四号、一九八七年。
- 鈴木英夫・吉井哲編『歴史にみる日本と韓国・朝鮮』赤楚書店、一九九九年。
- 林陸朗先生還暦記念會編『日本古代の政治と制度』続群書類従完成会、一九八五年。
- 鬼頭清明「所謂「任那日本府」の再検討」東洋大学文学部紀要、史学科篇、第一七号、一九九一年。
- 田中俊明『大加耶連盟の興亡と「任那」——加耶琴だけが残った』吉川弘文館、一九九二年。
- 寺本克之『任那と古代日本——歴史認識の原点をさぐる』新泉社、一九九九年。
- 井上秀雄「任那の調」朝鮮学報、第一七六・一七七号、二〇〇〇年。
- 李永植「任那日本府」を通じて見た六世紀の加耶と倭」東アジアの古代文化、第一一〇号、二〇〇二年。
- 李鎔賢「任那と日本府の問題」東アジアの古代文化、第一一〇号、二〇〇二年。
- 山尾幸久「任那日本府」の二、三の問題」東アジアの古代文化、第一一七号、二〇〇三年。
- 兼川智「任那日本府」説批判」東アジア日本語教育・日本文化研究、第六号、二〇〇三年。
- 熊谷公男「いわゆる「任那四県割讓」の再検討」東北学院大学論集、歴史学・地理学、第三九号、二〇〇五年。
- 東潮『倭と加耶の国際環境』吉川弘文館、二〇〇六年。
- 東潮「任那四県割讓」問題と歴史教科書」東アジアの古代文化、第一三七号、二〇〇九年。
- 森公章「任那」の用法と「任那日本府」（「在案羅諸倭臣等」）の実態に関する研究」東洋大学文学部紀要、史学科篇、第

三五号、二〇〇九年。

(35) 李進熙「古代におけるいわゆる〈南鮮経営〉論について」朝鮮史研究会論集、第一号、一九六五年。

李弘植「任那日本府は実在するか？」新東亜、一九六六年八月号。

韓ユウキン『韓国通史』ソウル、乙酉文化社、一九七〇年。

旗田巍「韓ユウキン『韓国通史』（ソウル一九七〇年）——『任那日本府』を否定」朝日アジアレビュー、第一巻第四号、一九七〇年。

井上光貞「金錫亨著朝鮮史研究会訳「古代朝日関係史——大和政権と任那」朝日アジアレビュー、第一巻第四号、一九七〇年。

(36) 宮原兔一「任那日本府をめぐる朝鮮古代史論争」歴史教育、第一五巻第五・六号、一九六七年。

金達寿「わが内なる皇国史観——『任那日本府』をめぐる」展望、一九七四年八月号。

泊勝美『任那日本府はなかった』二見書房、一九七五年。

金鉉球『任那日本府研究——韓半島南部経営論批判』ソウル、一潮閣、一九九三年。

高寛敏「〈百濟記〉と〈百濟新撰〉に関する研究」朝鮮大学校学報、第一号、一九九四年。

高寛敏「〈任那〉の滅亡と〈任那の調〉」東アジア研究、第七号、一九九四年。

高寛敏『日本書紀』と「三韓」と「任那」朝鮮大学校学報、第二号、一九九六年。

李永植『加耶諸国と任那日本府』吉川弘文館、一九九三年。

武光誠『日本と朝鮮はなぜ一つの邦にならなかったのか——聖徳太子の野望と加耶諸国をめぐる謎』新人物文庫、新人物往来社、二〇一〇年。